

行脚、または言語ゲーム

「蝶の雑記帳 112」

今年の初めに「現成公案に挑む 1 山門に立つ」（「蝶の雑記帳 108」）という文をつくった。番号を 1 と打ったからには続きを考えるつもりだったのだが、滞っている。

そこでも書いたように、道元の『正法眼蔵』の文章を読むとき、そこからさらに深い意味を汲みとろうとする前に、それを題材にして議論できる客観的な現代文にする段階ですでに、いっしょに読んでいる友人はずいぶん異なる読み方を提示した。わたしには、原文に書かれている語句以上の意味が付加されているように思われた。わたしの読んでいるのは水野弥穂子校註の岩波文庫本だが、友人の読んでいる本は寺田透・水野弥穂子校註『日本思想大系 道元 正法眼蔵』で、そちらにも水野弥穂子さんの名があるのだが、踏み込んだ註釈はたいへん異なるから、それは寺田透さんのだろう。とても難解な哲学的な語句で註釈がほどこされている。友人は、その註釈本だけでなく、和辻哲郎やほかの人の注釈書や解説書も読んでいて、深く考えた上でテキストを読みとっているのである。友人の読みとりと多くの考え深い人たちの読解を知って、わたしはたじたじとなってしまった。

その劣勢に対して、自分の読みを検討して文章にしたのが、先の「現成公案に挑む 1 山門に立つ」である。そこで書いたようにわたしは、初心の現代人が『正法眼蔵』を読むのに、

まずは原文の語句になるべく語を付加しないで平明な現代文として受けとって、その解釈を深めるのは次のステップだと考える。わたしは、この考えを放棄できないから、考え深い先人たちのたどり着いた読解との対立を解けないままにいる。

昔から『正法眼蔵』は「真理」と呼ぶべき深い内容を蔵していると受けとめられて、たくさんの人がそれを読んで考察を深め、そこから得たことを文章に著わしてきたのだろう。わたしのような者がその読み取りに異論を唱えるのは愚かなのかもしれない。しかしわたしは、『正法眼蔵』を哲学書として読みたい。ここで哲学書とは、人間にとって重要な問題を考察する書物のことで、それがむずかしい問題だとしても人が通常使用することばで書かれていて、わたしのような者でも徹底的に考察すれば理解に近づく可能性のあるような書き物という意味である。それ以上のことが書かれている“書物”があるとするなら、わたしがそれを理解し納得することはできないだろう。わたしは、『正法眼蔵』には普通の人間の文章が含みえない質的に異なる深みばかりがあるのではない、わたしでも奮闘すればその思想に近づくことができる、と思いたいのである。まず、書かれている文章が表現していることを、できるだけ削らず・足さず・変形せずに現代文にして読み聞く努力をすることが最初になすべきことで、さらに、考えを深めるのはそのあとだ、と考える。

こういう思いがわだかまったままで、ぐずぐず山門のあたりを徘徊しているのである。正式に入門もできないでいるが、いっそ、行脚に出ることにするか。わたしはいわゆる「禪」を学ぼうとしているのではないけれども、雲水のまねごとをして思いを巡らすことにしよう。それが、どこへたどり着くか分からない雲や水のさまよいと呼ぶものになるとしても。

『正法眼蔵』を読み解こうとした人々の議論の仕方を聞いていると、カントの『純粹理性批判』が提出した認識論以前の“形而上学的”な考え方、われわれの対面している世界とは独立して存在するような特別の「観念」をもとに議論を構成するやり方から抜け出ていないように思える（失礼！）。そして、題材からして超越的になるのを避けられないとしても、「超越」の問題に対して、カントの批判を明確に意識した論理の運びとはなっていないように思える。さらに言えば、現代の科学的に考える時代に、科学に拮抗できるほど認識論的に十分な考察と論理展開がなされているだろうか、疑問に思う。以上のように言うのは、わたしの思いこみかもしれない。だから、この行脚ではそういう点をもっともっというろいろ考えてみなければならない、

先回りして引用すれば、ウィトゲンシュタインは、「わたしが言語で考えるとき、言語的表現と並んでさらに<意味>がわたしの念頭に浮かんでいるのではない。言語そのものが思考の乗り物なのである」と言っている。だからわたしは、書

かれていることばをすなおに読み解きたいのである。

＊

そこで、『哲学探究』を著したウィトゲンシュタインの門をもう一度尋ねて、参学することにしよう。まだ“勘”にすぎないけれど『正法眼蔵』を読むと、道元自身は、その読解者とちがって（？）、後期ウィトゲンシュタインのように、ああでもないこうでもないことばを重ねて考えているのではないか、と思えるふしがあるから。

といっても、この参学も困難な作業になるだろう。また抜き書きのようなことになるけれども、なんとか読みとって、学習しよう。

ウィトゲンシュタインの言うように、「言語の教授（と学習）は、訓練するということ」、「一つの言語を想像することは、一つの生活様式を想像すること」、「ものの名を問うことができるためには、ひとはすでに何かを知っている（何かをやりはじめることをすでに知っている）」のである。「禅問答」、そして、道元のあのことばを尽くしての考察も、そのようにしてなされている、と考えなければならない。

われわれには、「命題記号と事実との間に純粋な仲介物を想定する傾向、あるいはまた、命題記号そのものを純化し、消化させようとする傾向」がある。「何事も通常のものごととともに生起していること、このことを見てとるのを、われ

われの表現形式がさまざまなしかたで妨げ、われわれをキマイラ狩りへと駆り立てるからである」、とウィトゲンシュタインは言う。さらに、「思考というもの、言語というものは、われわれにとって、世界の独特な相関物、映像であるかのように見える。命題、言語、思考、世界といった諸概念は、相前後して列をなし、それぞれ他と同値になる。だが、このとき、こうした語はなんのために必要なのか、それらを応用すべき言語ゲームなどないのである」とも言う。このことばに助けられて言えば、わたしには、『正法眼蔵』の註釈者たちの度の過ぎたむずかしい理屈づけが、「何事も通常のものごととともに生起している」と見てとるのを妨げている、と思われるのである。

もう一つつけ加えれば、ウィトゲンシュタインは、「考えるということは、… 非身体的な出来事ではない」と言っている。わたしは、書かれていることばを、あまりに抽象的すぎる“非身体的な観念”にもとづいて構成しなおして考察することを避けたいのである。この点に関して言えば、道元も身体を離れずに思考し修行することを主張している。

ウィトゲンシュタインは、ことばや思考や世界…などを、きわめて高度な何かなどとは考えない（道元の議論にも同じ考え方がしばしば現われる）。現に在る世界で人間がそれらについて考えて為すことができるのは、じつに現実的なことだ、と考える。だから、「自分たちの探求の特殊さ、深遠さ、

重要さは、それが言語の比類なき本質、すなわち命題、語、推論、真理、経験等々の諸概念の間に成り立つ秩序、を把握しようと努めている点にある、といった錯覚にわれわれはとらわれている。かかる秩序は、いわば、超概念の間の超秩序なのである。しかるに、「言語」「経験」「世界」といったことばにもし何か用法があるとするなら、それらには「机」「ランプ」「戸」といったことばと同じくらい低俗な用法があるのでなくてはならない」、と言う。わたしは、この言明には真実がある、わたしが考えるときにはそうすべきである、と思う。

こういう考え方はさらに続く。「透明な純粹さという先入見は、われわれが自分たちの全思考を転回することによってのみ、取りのぞくことができる」、「論理の哲学が命題や語について語るのは、日常の生活の中でわれわれが語っているのと違った意味においてではない」、「われわれは言語の空間的・時間的な現象について語っているのであって、非空間的・非時間的な非実在物について語っているのではない」、「言語(あるいは思考)とは何か比類なきものである — これは、それ自体、文法上の錯覚によってよび起こされた一つの迷信(誤謬ではない!)であることを示している」、「われわれは、知識・存在・対象・自我・命題・名などの語を、その形而上学的な用法から、ふたたびその日常的な用法へと連れもどす」…。

反省すれば、わたしの思考はしばしばそういう迷路に迷い

込んでいる、と思う。そして、『正法眼蔵』の註釈者たちもしばしば、“真理”に到達するために高度に抽象的な理屈を展開することによって、ウィトゲンシュタインの批判をまぬがれない古い形而上学的な議論に踏みこんでいるのではないだろうか。

ウィトゲンシュタインは、「理解を<心的な出来事>などとはけっして考えるな」と言う。それに、「もしかれが突然その先を知り、そのシステムを理解したのなら、かれはおそらく特別な体験をしたのだ」ということばが追加されている。この言明は、次のような考え方をすれば、道元が仏道の修行を「身心学道」とするのに対応する。「仏道」の意味が問題になるが、仏の説いた道を「禅」の追求する修道と解して、水野弥穂子の「道心とは真実の生き方をしようとする心」という註釈をほどこせば、その道を学ぶには身と心をもって行なうのだという道元の説くところに通じる。そして、「修道はあるとき悟りに至る」と説く禅のことば「悟り」を、そういう“体験”と解することができるだろう。

その機微をわたしが理解できないのは、ウィトゲンシュタインによれば、「ある文章を理解するということは、ある言語を理解するということ、ある言語を理解するということは、ある技術に通暁すること」だからである。わたしが『正法眼蔵』の理解に苦勞しているのは、道元が展開する言語とその説き方の技術に通暁していないからなのだ。

ここまでの『哲学探究』の抜き書きは十分ではない。まだまだウィトゲンシュタインに聞かなければならないことがたくさんある。この考察はこの一回で終わることはできないだろう。だが、精力を使い果たしたので、それはまたの機会にして、一区切りつけることにする。それにしても、もう一言何か言って中断する区切りとしよう。

わたしは、ウィトゲンシュタインが繰り出すとめどない思索とその文章のつらなりを理解するのに困っている。しかし、これらの思考が全体として言おうとしていることは、生きている人間が現実を考えていることあるいは考えようとしている課題に真正面から取り組んでつかみとったものだ、と思う。そうして、それらの考え方は、肝心な点で、『正法眼蔵』を読むときに出会った注釈者たちの思考法と異なるように思う。

もちろん、道元は「仏法」を信奉する立場から『正法眼蔵』を書いたのだから、「超越」を戒める立場のウィトゲンシュタインの観点と異なるだろう。だから、両者の思想は根本において相容れない、と考えるべきなのだろう。しかし、思考の仕方に相通じるものがあるようにも思う。たとえば道元は、仏教で有名なナーガルジュナの悟りの境地「円月相」を話題にすると、「描けないものは描かないのがよい」と現実的な物言いをする。ことばを積み重ねていくとき、避けがたい

ところがあっても、可能なかぎり論理の飛躍が起こらないようにことばを運んでいるように見える。相容れない「一切衆生有仏性」と「一切衆生無仏性」との二つの命題をともに両立させるのに、決して等号で結ぶことはしない。だから、両方の重大さを追究して考察を重ねることになる。それでも最後まで等号で結ぶことをせずに、いわば高みへの動的な運動のままの記述にとどめる、とわたしには思える。

そして、道元には、修道という実践がある。そちらには、ウィトゲンシュタインのいう現実の生活・日常があると考えてはいけないだろうか。もしそうなら、それを考えるとき、それにふさわしいウィトゲンシュタイン的な考察やことばが現われるはずだ。そちらの面の考察も必要だと思う。

2022 年 5 月小満

海蝶 谷川修

